

学習と生活 1790—1960

——英国成人教育運動史——

Learning and Living 1790-1960

J. F. C. Harrison

監訳 新海英行

訳 英国成人教育史研究会

(旭多貴子・杉本武之・杉野利幸・林恭子・藤江知子)

第2章 (その②)

より直截に言えば、成人教育運動の主要な流れの中には、この伝統のもう一つの分派——相互向上協会——があった。この協会は少人数のメンバーから成り、互いの家か、その目的のために借りた小部屋に集まった。僅かで簡単なルール、諸クラスの学習計画、小論文の朗読、そして、討論が立案作成され、少量の本がささやかな図書室の基盤として集められた。教育はメンバー自身によって自発的に行われ、基本的には3Rsの上達を促進するよう計画された。しかし時には地理学、歴史、フランス語、化学にまで及んだ。討論サークルと、討論により人前で話すことを経験する機会も頻繁に提供された。これらの協会のまさにその単純さが、それらの最大の長所であり、多くの異なる種類の土壌の中で急速に芽生えることができる種子を用意した。「それらは我々の時代の教育のメソヂスト方式と見なされるであろう¹」とスマイルズは記した。そのような協会はその性質上、短命のものとなりがちであった。つまりそれらは急速に芽吹き、その目的を達成し、そして、その知的資源を使い果たすやいなや枯れ果てた。同様に、それらはある特定の時期だけに生まれたわけではなく、19世紀の大半を通して栄えた。もっとも1844年の後の10年間はそのような諸協会が特に数多く作られた。それらは入念な議事録や報告書を必要としない未発達な組織のゆえに、記録をほとんど残さなかった。そのためそれらの歴史は、興味を持った観察者の注解や、労働者たちの自伝に記録された経験から辿られなくてはならない²。

それにもかかわらず、ささやかな相互向上協会の開花は、より入念に作り上げられた諸組織の発展に劣らず重要なものであった。そのようなタイプのあらゆる自発的な相互向上協会は、彼らが、解明を求めるには十分に重要であると感じていた諸問題への、いくつかのグループの取り組みの現れであった。そのような成人教育の諸活動の自発性こそが、——おそらく形式的で制度化された成人教育以上の、より必要と感じられた問題に彼らが関わることへの保証なのである。もし、成人教育の根本的な目的の一つが、人々が産業社会の中で生きていくうえでの諸問題とうまく折り合いを付けることを可能にさせることであ

¹ *Howitt's Journal*, I (1847), Weekly Record, 17 April 1847, p.32.

² E. g. William Lovett, *Life and Struggles* (1876), p.34 ; W.J. Linton, *op.cit.*, p.17 ; W.E. Adams, *op.cit.*, p.115.

るならば、そして、もしそのような成人教育が小さな民主的集団の中で最善の形で続行されたならば、相互向上諸協会はより永続的で、より見栄えのある成人教育諸機関として少なくとも成果があっただろう。

19世紀中葉の数十年の間に、ヴィクトリア朝時代の上層の人々には、労働諸階級の状態を向上させることを可能にする3つの主要な手段があるように思われた³。一つ目は最も望ましいもので、中産諸階級や既存の教育機関の支援を通じたものであった。二つ目は（実行不可能でなかったとしても、ことによると危険なものだったかもしれない）自発的な諸協会を通じた労働諸階級の自助という手段によるものであった。そして、三つ目は——自由放任主義社会の中で支持されたどころか、むしろ黙認された——政府の援助によるものであった。成人教育に適用されたこれらのうちの二つ目のものは、メカニクス・インスティテュート運動の中で徹底的に試されたが、設立者たちが望んだほどには完全に成功しなかった。三つ目の手段は成人教育への政府援助のそれであり、1862年の夜間学校改定条例⁴の後まではまずまずの程度でさえも、満足できるものでも有効なものでもなかった。しかし、40年代と50年代には、諸相互向上協会を通して行われた二つ目の自助の訓練は、労働者たちが自発的に採用した教育的進歩のための手段を提供した。そしてそれらは間もなく彼らの社会の上流の人たちの賛同を得た。

少数の労働者が集まって、相互努力を通じて自分たち自身の教育的向上をはかるという考えの単純さそのものが、そのようなソサエティが中産階級によって注目されるずっと前から多くの場所に存在することを、十分に可能にしたであろう。教授法的に考えれば、相互向上協会は、18世紀に優勢であった個人学習と、優れた教師の下での組織的教育との中間段階に相当した。しかし、成人教育の機関や施設の歴史は、多くの重なり合いを示している。そして事実、相互向上協会は、メカニクス・インスティテュート、成人学校、そしてその他の正式に組織された成人教育事業と並行して存在した。当時、それらの発展に非常に興味を抱いたサミュエル・スマイルズは、1847年にウェスト・ライディングには一つかそれ以上の相互向上協会が存在しない町や村は殆ど無い、と断言した⁵。彼が最もよく知っていた相互向上協会は（そして、それはイングランド北部の多数のその他の協会の典型であった）1844年、リーズで4人の若者によって始められた。間もなく、その他の工員たちが加わった。彼らは最初、仲間の一人のコテージの一室に集まった。しかし、夏が来ると、彼らはある古い農業倉庫に移動した。そこで、熊手や鍬や割れた植木鉢に囲まれて、彼らは読み、書き、文法、算数を独習した。再び冬が来た時、彼らは一時的にコレラ病院として使用されていた部屋を借りた。それを使用する危険を冒す者が誰もいないという理由で安く借りられたのである。1845年の3月には、その人数は約100名に増えた。

³ これら3つの主要な手段について、ホウルは、労働階級の住宅供給に関連して調査をした。James Hole, *Homes of the Working Classes* (1866), pp.68-106。モーリスは、労働階級の成人教育のための可能性ある支援源について調査する中で、同じ手段を想定した。F. D. Maurice, *Leaning and Working* (1855), pp.172-85。

⁴ For the development of government grants for evening schools see *Minutes and Report of the Committee of Council on Education* (1851-2), I, 74-5, and M. E. Sadler, *Continuation Schools in England and Elsewhere* (Manchester, 1907), pp.58-60.

⁵ *Howitt's Journal*, I (1847), Weekly Record, 17 April 1847, p.32.

そして、「さらに意欲的になったので、彼らは講義をしてもらうことを願うようになった⁶⁾。スマイルズが彼らを知ったのはまさにこの時であった。というのも、彼らが「何か少し話をしてほしい」とスマイルズを招待したからであった。スマイルズは彼らの「驚嘆すべき自助精神」に感動し、そして、その結果、彼らに、自らの努力によって貧困と蒙昧から立身した人々についてのテーマで数回講演をした。彼の有名な『自助論』の中心部分はこちらの講演が基になった。その本の25万冊以上は彼の生存中に出版された。

この発展のパターンは、地方による差異はあったが、19世紀の半ばには殆どの工業化した町や村に共通のものであった⁷⁾。メカニクス・インスティテュートのような他の成人教育機関が既に存在していた地域においてさえも、諸相互向上協会が自発的に形成されたことは、その諸インスティテューションへの不満の表れであった。時々、この不満は、メカニクス・インスティテュートで禁じられていた政治的、宗教的テーマを討論したいという願望として表された。しかし、もっと頻繁に表明されたその不満は、メカニクス・インスティテュートにおけるクラスのタイプと教育方法が、普通の労働者にとって馴染みがないものと感じられた、という単純なものであった。このことが非常に強く感じられたので、多くの場合、普通の労働者は、メカニクス・インスティテュートが提供する「徒に礼儀を重んずる」教育の機会を利用するよりも、むしろ正規の教育を受けていない数名の仲間の助けによって苦勞しながらなんとかやっけて行こうという気持ちになった。そもそもの形の相互向上協会は、労働者の教育的要求に対する独自の解決策を表していた。それは、労働階級の成人教育における全ての初期の試みの中で最も真に独特なものであった。この理由のゆえに、その特徴は一見して分かるものよりもっと大きな意義を持っている。最初に読み書きの技能を獲得し、次にそれらを実践する手段としての基本教科(3Rs)への集中は、多くの労働者にとって最優先の必要事であった。討議する授業と討論会の重視、そして、小さな図書室を作るための断固とした闘争は、その他の広く感じられていた不足感を反映していた。そして、1ペニーか2ペンス(それはメカニクス・インスティテュートの通常の会費と同額であった)という週ごとの支払いは、労働者たちが、もしそれが彼らの必要と関連しており、彼らの週給賃金労働者という経済習慣に適していたならば、成人教育に対して支払う覚悟があることを示していた。相互向上協会の蜉蝣のような短命性もまた、そのような労働階級に起源を持つ組織の特徴の一つであった。一つのソサエティが大きくなり、繁栄し、永続するようになった場合には不可避免的に、よりメカニクス・インスティテュートに近づいていった。そして実際に多くのインスティテュートはこのようにして生まれた。

諸相互向上協会は教育的には最も効果があった一方、労働階級の自助の手段のうちで、決して最も大きいものでも強力なものでもなかった。精神面で、時には職員の面でそれら

⁶ Samuel Smiles, *Self-Help* (1859), introd., p. iv.

⁷ 『リーズ・マーキュリー』誌は40年代にその地域にあった多くの相互向上協会の記事を載せていた。例えば、Wakefield(1847), Holbeck(1847), Beeston(1849), Morley(1844, reformed 1849), Rastrick and Brighouse(1845), Batley(1846), Yeaden(1846)である。主要なタイプから変化した団体としては Youth's Guardian Society があり、そのよく栄えた例として Wortley, Bramley, Holbeck のものがあつた。

に近かったのは北部の町で盛んに活動していた諸フレンドリー協会であった⁸。それらフレンドリー協会の公然の目的の中に、成人教育は通常は含まれていなかった。しかし、(中産階級の共鳴した支持者たちに強く勇気づけられた)より思慮深い会員たちが、教育と自己向上の方向へ兄弟会員たちの注意を向けさせようとしたのは自然なことであった。リーズでオッドフェロー・リタラリー・インスティテューション(Oddfellows Literary Institution)は 1,200 冊の蔵書の図書室を持ち、会員のためにクラスや講義が計画された。

「オッドフェロー大連合会」誌(the *Magazine of the Grand United Order of Oddfellows*)はリーズで出版され、1845 年からサミュエル・スマイルズによって編集された。寄稿は殆ど完全に会員自身からであり、支部からのニュース、短編、そして詩からなっていた。マンチェスター支部もまた年 4 回「オッドフェロー・マガジン」(*Oddfellows Magazine*)を出版した。これらのような地味なジャーナルの中に、独学の労働者の文芸的努力と、彼らの文化的な希望と願いが表現の場を見出した。他方、当時のもっと仰々しい雑誌においては、彼らの考えは中産階級の都会的な標準と考えによって上塗りされていた。ブラッドフォードでは、リーズのそれに似たリタラリー・インスティテューションが設立された。もっと小さな地域では、会員たちは講義や討論のためにお互いの家に集まった。そしてその必要が生じた時に、彼らは相互向上協会に組織された。特に特徴的な形態の労働階級の成人教育は、フレンドリー協会からは発展しなかった。より成功した事業は、間もなく既に確立された成人教育運動に吸収されていった。そして、それらに対する要求が変動するにつれて、より小さな教室や向上グループが生じ、そして消滅した。それらは、民衆自身が成人教育活動を通じて満たされ得ると感ずる一定の要求と希望を表現しており、それらの意義は、諸相互向上協会同様、そこにあった。

成人教育を通しての自助は、1840 年代には、まだ、労働諸階級がある程度の個人的なそして社会的な進歩を確保することを可能にするかもしれないもう一つの手段であるように思われた。その後、自助の優れた諸点に対する中産階級の強い熱意が、それを個人主義という支配的なイデオロギーに吸収させ、社会の諸悪に対する集団的、共同の責任という考え方に対立する、独立した市民性を強化する一つの手段として、その価値を強調した。しかし、感じ取られたニーズへの自発的な労働階級の人々の反応として、元々の表現では、自助は、しばしば集団的な形態を取った。相互向上協会は、本質的には、個人だけではうまくできない何かあることをするために、労働者たちによって設立された未熟な段階の組織であった。こうした取り組みの血統は、自由放任主義よりもむしろオウエン主義であった⁹。サミュエル・スマイルズは、相互向上協会に初めて興味を持つようになった時、相互向上協会や協同組合の考え方に共感した。そして、その少し前に、急進的な「リーズ・タ

⁸ 1846 年にリーズにおいて、多くの小団体や埋もれたクラブや宗教的なフレンドリー協会を除いた主要 5 団体の総人数は 14,000 人であった。その最大のものはマンチェスター・ユニティーのオッドフェローで 8,000 人を擁していた。そしてリーズのグランド・ユニティテッドは 2,000 人を擁していた。「ピープルズ・ジャーナル」(1846)pp.136-8 のスマイルズによる記事。

⁹ 例えば、1857 年に出版された、ロッチデールのパイオニアであるジョージ・ジェイコブ・ホリヨーク (George Jacob Holyoak) の経歴は『民衆による自助』という表題であった。そして、彼は、40 年代のオウエン主義の自助の考えに負うところを鮮明に示している。

イムズ」(Leeds Times)の編集の仕事をしたばかりであった。しかしながら、その時から1859年の『自助論』出版までの間に、その考え方は微妙に変わっていった。元来、新しい産業社会の中で拒絶されていた文化的、物質的恩恵の幾つかをつかみ取ろうとする労働階級の人々の方策であったものが、今や、より良い社会状態を求める労働者たちの要求に対する中産階級の人々の対応策になった。社会的経済的に重要な事柄への国家の行動が、『自助論』においてそうであるように、ひとたび完全に排除されてしまえば、社会改良に対して、それに代わる何らかの通路が労働諸階級に提供されなければならなかった。これが、自助という原理の中に——道徳的自制といった他の救済策とともに——提供された。それは、自由放任主義に肯定的な観点を与え、教育的、社会的、経済的諸分野にも同様に効力のあるものであった。さらに、自助は、現実的な社会のプログラムであるという利点を持つだけでなく、道徳的徳目という利点も持っていた。もしも、労働諸階級が貧しく無知であるとしたなら、それは、突き詰めてみれば、彼らが道徳的に不完全であるが故なのだ。『自助論』の中で、スマイルズはこう書いた。「この国の普通の労働者の状態が、有益で、立派で、尊敬すべき、幸福なものであってはならない理由は何ひとつない」。自助は、もう既に何人かの労働者たちの地位を向上させてきたが、全ての人々にも同じようにすることができるのだ。

成人教育は、間もなく、労働諸階級の人々が奨励されるべき、自助の最も望ましい形態の一つとして認識された。質素や儉約と同じように、それは、自制を通して知性の強化を推し進めるためのすばらしい機会と、社会全体への健全な経済的社会的恩恵とを結びつけた。一日に12時間か14時間働いた後に残された僅かな余暇に真剣に勉強しようという要求は、非常に努力を要するものだったので、大多数の労働者は尻込みせざるを得なかった。それゆえに、自己向上という困難な仕事を開始した例外的な少数者を、文化的啓蒙には喜びがあるという約束によって奨励し、忍耐と勤勉という道徳的特性を称賛することが必要となった。スマイルズは、よく考えもしないで単純に「出世する」ための手段として自己教育をアピールすることの限界を明確に理解した。そして、この「修養についての低俗な考え」を退けた。多くの職人たちは、教育的努力にもかかわらず、決して「出世する」ことはないだろう。自己向上の目的は、それと「高尚な思想とを結びつけることによって、労働の状態を高めること」でなくてはならない。すなわち、スマイルズが早い時期に考えを表していたように、「労働諸階級の人々の教育は、究極的には、少数の賢くて才能に恵まれた人々をより高い生活階層に昇進させるための手段としてではなく、この労働階級全体を高め向上させる手段——労働者の全体の状態を向上させる手段として認識されなければならない¹⁰」これは、19世紀の遅くまで、重大な悪影響を及ぼすことになる成人教育の考え方であった。その起源をたどれば、それは、その問題に関する労働階級の見解が非常に

¹⁰ サミュエル・スマイルズは *The Education of Working Classes* (Leeds1845)、*The Annual Report of the Yorkshire Union of Mechanics Institutes* (1856) , pp.19-20, において、同様に、インスティテュートの主たる目標は、選ばれた個々の社会的上昇ではなく、——「教育の普及は、少数の人の希望を活性化するよりもむしろ、膨大な民衆の状態を向上させることである」と強調した。後にこの見解は、ラスキン・カレッジ、オクスフォード(1899年に設立)、そして、労働者教育協会(W.E.A)における労働組合の先駆者の中で再び現れることとなった。(たとえば J・M・Mac Tavish)

厳密な意味で実用本位となった時に、中産階級の急進的な人々から起こったものであったように見える。そして、19世紀の終わりに、それは、高まりつつあった労働運動が、それを用いて社会的平等への要求を促進させようと望んだ強力な槌として現れた。

しかしながら、労働諸階級全体を向上させる手段としての自助の限界は、他の諸分野において明らかになったように、間もなく成人教育においても明白になった。少数の例外的な労働者は、確かにこのアピールに応えることができた。しかし、大多数の労働諸階級の人々にとって、自助を提案されても、それは、自分の靴の紐で自分の体を引き上げるように忠告されたようなものにすぎなかった。「労働者の貧困層の精神的環境は、一種の人権剥奪状態を形成している、ということは否定できない」と、次のように R・W・ハミルトン師は書いた。

我が国の全ての人々がより良い状態に向上することができる、と言っても、それは虚しいことである。それは理屈である。それは可能性である。どうしたらそうなり得るのか？それは、教育を流行になるほどまでに分け与え、そして、民衆をあまねくこの出発点にまで引き上げるように方向づけることができる人々の義務である。彼らにこのように向上するための能力を与えなさい。ある程度引き上げられた時に、もし彼らが前進していないなら、それは全く彼らの責任である。それ以降は、進歩するもしないも彼ら自身の問題である。だが、その時まで、彼らは、深い低下から抜け出ることが殆どできないだろう。救出の希望が、彼らの耳に囁かれることはなかった。向上の手段は、彼らの使用のために供給されていない¹¹。

中産階級からの何らかの初期の援助に対して、最小限の要求がなされた。しかし、それすらも自助の諸利点に対する完全な無関心やあるいは敵意といった労働諸階級の最貧困層の間に共通する障害を克服することはできなかった。成人教育は、彼らのためのものではなかった。それは、いつでもそういうものであるように、少数の人々の活動であった。だが、その少数の者たちにとっては、自助は、ヴィクトリア朝時代を通して、一つの効果的な成人の教育手段であった。相互向上の実践は、それがサミュエル・スマイルズによって一般化されるずっと以前から始まっており、第一次世界大戦まで栄え続けた。自己教育をしたルーベン・ジョージ(Reuben George)やジョージ・トンプソン(George Thompson)のような人々(the ranks)から 1903年に労働者教育協会(Workers' Educational Association)の先駆者たちが生まれ¹²、相互向上協会や、ブラッドフォードとカルダー・ヴァレーにおけるチャペルや日曜学校付きのコテージ集会から、1907年以後に最初のテュー

¹¹ ハミルトン前掲書の 78 頁と .A.V.Dicey, *The Working Men's College, 1854-1904*(1904), p.245, は同様の結論に到った。「…人々が同じような有利な立場で出発していない社会では、自助は…大衆の生来の適性や能力を発達させ、そして彼らが知識の正当な分け前を入手することを可能にするには十分ではなかった」

¹² Reuben George はスウインドン(Reading)の労働者で W.E.A. の先駆者であった。アルバート・マンスブリッジの *Fellow Men*(1948) pp.43-5 を参照せよ。George Thompson はハリファクス(Harrogate)の建具師で、後に、W.E.A. のヨークシャー支部の最初の支部書記になった。pp.289-99 を参照せよ。

トリアルクラスの学生たちが生まれた。1894年に、相互向上協会と若者クラブの協議会がブラッドフォードで組織され、何年間に亘って続いた。相互向上協会の柔軟性と打ち解けた民主的な性質が、その協議会を、思慮深い若者たちがその時代の知的必要を満足させることができる素晴らしい手段にしていた。読み書きが全くできないか、あるいは中途半端にしかできない人たちに対して、その協議会は好意的な雰囲気の中で、3Rsの教育を与えることができた。自分の社会的体面を良くしようとしていた人々や政治的野心を持っていた人々に対して、それは、雄弁術や討論術を練習する機会を提供した。また、そうした機会を願望していた人々には、真面目で、よく訓練された議論の楽しみを提供した。何よりもまず、それは際立って立派なものであった。

3. 有用知識の普及

私たちが今携わっている事業の重要性に優るものは、何もありません。それは、この共同社会のあらゆる階級の中に、知識という賜物を広めることであります。それは、この偉大な共同社会が持っている群を抜いて最も有用な人々に、最も有用な諸技能を教育する手段を提供することであります。リヴァプールにおけるメカニクス・インスティテューションの設立は、この町の人々の歴史の中で最も重要な画期的な出来事の一つであり、諸技能と諸科学における最も偉大な進歩を湧出することが期待される源泉であり、そしてそれゆえ、この町の人々の境遇と道徳への最も喜ばしい結果を湧出することが期待される源泉であると、私は考えています。

——ヘンリー・ブルーム、『リヴァプール・メカニクス・インスティテュートの設立に関する演説』（1835年）

19世紀前半の成人教育は、主として労働諸階級のための事業であると見做されていたので、成人教育事業が成功したか失敗したかの判断は、先ずは労働する人々を引き付けた度合と、彼らを益した度合を基準にして為された。1870年以前の成人教育を目的とするあらゆる教育機関の中で飛び抜けて最も印象的なものは——人数に関しても教育達成に関しても——メカニクス・インスティテュートであった。それはその名が示しているように第一に働く人たちのために企画されたものであった。それでも、ヨークシャの幾つものメカニクス・インスティテュートの年次報告書と議事録についての研究から明らかになることは、それらメカニクス・インスティテュートが本質的には中産階級の成人教育の大胆な事業であったということだけである。1840年代までは、当時のメカニクス・インスティテュートの観察者や批評家は、それらメカニクス・インスティテュートが「失敗事業」であるという観念に取り憑かれていた——また、1824-25年のそれらの当初の狙いという観点から判断すると、事実それらは失敗であった。しかし、台頭しつつあった中産階級の大望という光で照らして考えてみると、メカニクス・インスティテュートが果たした社会的役割は、取るに足らないものではなかった。科学的な精神を持つ労働階級のエリートを創り出すことに限って見れば、それらは失敗であった。だが、あの新しい産業社会内部の人間関係の諸問題の幾つかと取り組んだ一つの試みとして見れば、より前向きな解釈が許されるものであった。メカニクス・インスティテュートが、当時の批評家たちによ

って記述されたような教育の失敗として出現していたならば、ウェスト・ライディングの多くの町でよく知られている教育機関になった（そしてその世紀のかなり遅くになってもそれが続いていた）ということは、殆ど考えられないことであつた。頑丈で無表情なヴィクトリア朝・ゴシック調のそれらのインスティテュートは——苦勞をして集められた寄付金によって建てられ、市民の自慢の種になったことによって聖化された——彼らの社会的希望と社会的理想の領域に存在したかなり本質的なものを鮮明に映し出していた¹³。

ヨークシャにおける幾つかのメカニクス・インスティテュートの設立は、1823年のロンドン・メカニクス・インスティテュートの創立のすぐ後に続いた。ベインズ家（The Baines）の父と息子、そしてジョン・マーシャル・ジュニア（John Marshall Junior）は、ロンドン・メカニクス・インスティテュートの創設者の一人であるブルームと連絡を取っていた。息子のエドワード・ベインズは、ロンドン・メカニクス・インスティテュート結成後にロンドンのファルコン・スクエア（Falcon Square）にあったある古いチャペルでパークベックとブルームが500名から600名の「外見が汚れたままの職人たち」に講演したのを、若者としてどのように聞いたか、その様子を晩年に描写した。1823年12月に、「リーズ・マーキュリー」（*Leeds Mercury*）はリーズにメカニクス・インスティテュートを設立するための企画を発表した。1824年の殆ど一年の間、この案は検討され続け、そして支援策が話し合われた¹⁴。その年の4月に趣意書が発表され、そうして12月1日に、このインスティテュートは、コート・ハウス（Court House）でベンジャミン・ゴット（Benjamin Gott）の司会によって行われた集会で、正式に設立された。この運動はその後ウェスト・ライディングで急速に広まり、1825年の終わりまでに、メカニクス・インスティテュートは、キースリ（Keighley）、ブラッドフォード（Bradford）、ウェイクフィールド（Wakefield）、デューズベリ（Dewsbury）、ハリファックス（Halifax）、ハッダーズフィールド（Huddersfield）、スキプトン（Skipton）そしてリッチモンド（Richmond）に設立された。これらの中の若干のもの、例えばブラッドフォードとハッダーズフィールドのものは、1825 - 26年の不況で潰れ、後年に再建されねばならなかった。しかし大多数はこの初期の嵐を上手く運営して乗り切った。ブルームのパンフレット『民衆教育に関する実地観察報告書…』（*Practical Observations upon the Education of the People*…）はヨークシャで相当な注目を浴びた。そしてベインズの息子は、その内容を要約して、「ブルームのパンフレットを手にして、この新しいシステムを説明し勧めるために、ヨークシャの多くの町や村」で講演をした様子を、後に描写した¹⁵。

¹³ 1858年までに、少なくとも、ヨークシャにあった25のメカニクス・インスティテュートが、自身の建物を建てていた。次の建築プロジェクトが手元にある。モスリ（Mossley）（1,800ポンド）、マーズデン（Marsden）（2,000ポンド）、ハリファックス（8,000ポンド）、ホルベック（Holbeck）（1,500ポンド）、デューズベリ（Dewsbury）（1,200ポンド）、ハッダーズフィールド（6,000ポンド）。1868年にリーズ・メカニクス・インスティテュートの新しい建物が開館した。それには30,000ポンドほどがかかった。

¹⁴ 職工と職人のための図書館の提案が1821年に為された。しかしこの構想は進展しなかった。「リーズ・マーキュリー」1821年12月8日号を参照。エドワード・ベインズ・ジュニアは、『エドワード・ベインズの生涯』*Life of Edward Baines*, (1851), 2nd edn., 1859, p. 103.）で、この提案をマーシャルに帰している。

¹⁵ ベインズのための公開贈呈式での彼の挨拶。これは1880年12月3日にリーズのアル

ヨークシャーにおけるメカニクス・インスティテュートの創立に付随していた諸状況の比較と、これら最初のメカニクス・インスティテュートの公表された目的と目標は、諸地域の間にあった著しい差異を明らかにする。しかし、大多数の場合において、中産階級の支援と激励に、それらが依存していたことは明らかである。キースリとハリファクスのように、その最初の計画発案が労働階級から出た場合でさえも、中産階級の支援者たちとの提携がその事業の成功には不可欠であると考えられた¹⁶。リーズにおいては、主導権と指導が中産階級のものであること、そして、この町の最も影響力がある製造業者たちがこのインスティテュートに結びつくべきだという主張しかされなかった。学院長と副学院長というその最高の役職が、それぞれベンジャミン・ゴットと国会議員のジョン・マーシャルに握られていた。——二人ともリーズの大成功した繊維関係の大家であった。ゴットが250ポンドをこの新しいインスティテュートに寄付し、やや少ない額をマーシャルとベニヨン(Benyon)と他の繊維工場所有者たちが寄付した。その理事の過半数はホイッグ党员と非国教徒であった。しかし、二人のトーリー(ゴットとハンター博士)と一人のアングリカンの聖職者(ジョージ・ウォーカー(George Walker)師、グラマースクールの校長)も含まれていた。産業資本家と非国教徒とあの新聞(「リーズ・マーキュリー」はこの計画を可能な限り支援した)との強力な協力関係に、リーズの知識人の支援が付け足されていた。アダム・ハンター(Adam Hunter)博士、ジェイムズ・ウィリアムソン(James Williamson)博士、ロバート・ディズニー・ソープ(Robert Disney Thorp)博士が積極的に支援した¹⁷。リーズ・メカニクス・インスティテュートは、このように、この町の中産階級の関与という堅く広い基礎の上に作られた。その「規則と規定」(1824年)は、年間2ポンド10シリングの入会金を払った者だけが、このインスティテュートの業務に関する事実上の管理権を持つ、と定めていた。その規則IIは、半年に5シリングを支払う平会員は「この協会の財産に関する関与権も会議の投票権も持たない」とはっきり規定した。諸メカニクス・インスティテュートの定款は様々であったが、管理権の一部が労働階級に与えられているのが普通のことであった。実は、リーズ・メカニクス・インスティテュートの設立に先立って、ベインズはこう主張していた。「このインスティテューションの設立を…有用なものや…実用的なものにするためには、その職工たち自身が…その運営に主要な役割を担うことが絶対に必要であります¹⁸」。またブルームは、インスティテュートというものの運営委員会の少なくとも2/3は労働者にすべきである、と主張した。しかし、リーズ・メカニクス・インスティテュートは中産階級の独裁的な一握りの集団によって管理された。というのは、ブルームが観察して遺憾に思いながら書いたように、「…決定権を持つ者の殆どが上層階級に属している¹⁹」からであった。ウェスト・ライデ

バート・ホールで行われた。 *Memorial to Edward Baines on The completion of his 80th Year* (London, Manchester and Leeds, 1880), p. 31, の中で報告されている。

¹⁶ *A.R., Keighley M.I.* (1826); and circular (3 May 1825) in (MS) 'Proceedings, Halifax Mechanics' Institute', Halifax Public Library.

¹⁷ *Rules and Regulations, Leeds Mechanics Institute* (1824), and *A. R., Leeds M. I.* (1826).

¹⁸ Article in *Leeds Mercury*, July 1824, quoted in Baines, *Life*, p.104.

¹⁹ *Practical Observation upon the Education of the People* (1825), p. 24.

イングの他の町では、中産階級による管理は、通常はリーズほど露骨には主張されなかったが、その町の富裕な会員たちの支援が一樣に目立っていた。ハッダーズフィールドでは、ジョン・ラムズデン卿 (John Ramsden) とその息子 (最も有力なホイッグ党支援一族の一員で、ハッダーズフィールドの全町域の殆どを所有していた) から巨額の寄付 (100 ポンドと 50 ポンド) を受けた。ハリファクスにあるインスティテュートの初代学院長は、この町の指導的な製造業者のジョン・ウォーターハウス (John Waterhouse) であった。デューズベリ (Dewsbury) では、そのインスティテュートは「町の主な製造業者の数人…」によって支えられた²⁰。

その地方の中産諸階級の支援を確保しなかった、あるいは最悪の場合、彼ら中産階級の明白な敵意を引き起こしたメカニクス・インスティテュートの運命は、最初のブラッドフォード・メカニクス・インスティテュートのケースによって例証された²¹。1825年2月に創立されたその新しいインスティテュートは、事実上の管理権を労働階級のメンバーの手に委ねるという定款を採用した。名誉だけの、財産のある、寄付をする会員という一般的なカテゴリーが規定されたが、『規則Ⅱ』(Rule II)には、その運営委員会を構成する役員と16名の理事は年毎に投票で選定されるが、「そのように組織された委員会の大半は常に職人であるべきだ」と規定されていた。更に、書記でそのインスティテュートの指導者はスクワ이어・ファラー (Squire Farrar) であった。彼は、ブラッドフォードの梳毛工の1825年6月の集会出席者の中で指導的立場にあったジョン・テスター (John Tester) と親しい間柄であった。ファラーは急進的であつ「無神論者」として知られていた。そのインスティテュートのもう一人の発起人は、その町で本屋を営むクリストファー・ウィルキンソン (Christopher Wilkinson) であり、彼もまた公然たる無神論者であった。その結果、そのインスティテュートは、国教徒と非国教徒から同様に不信心の温床であると非難された。そして、その主要メンバーの何人かは好戦的な労働階級運動と交流があるという理由で中産階級の人々から避けられた。それは間もなく閉校したが、おそらく1825年の長引いたストライキという騒動の中でのことだっただろう。それが一般の人々の心に残した印象は、そのインスティテュートが、用心深い中産階級と非国教徒の指導のもとで1832年に再建された時には、まだ明らかであった。新しい創設者たちは、不信心についての非難と、リスペクタビリティの欠如に対してとても敏感だったので、『諸規則』(Rules) (1832)の中に、不信心に対するある特別な声明を書き込んだ。そして、そのインスティテュートは「不満を生む学校」ではないと繰り返し強調した。

²⁰ 1st A. R., *Huddersfield M. I.* (1826), Minutes (undated) Halifax M. I., and *Wakefield and Halifax Journal*, 8 July 1825.

²¹ Details from A.R., *Bradford M.I.*, Minutes, Bradford M.I., and Charles A. Federer, 'The Bradford Mechanics' Institute. A History' (1906, Typescript in Bradford Mechanics' Institute).